

漱石とキッチナー元帥について

小鹿原敏夫

(0) はじめに

漱石と同年に没したキッチナー元帥 (Horatio Herbert Kitchener 1850~1916) はヴィクトリア朝末期からエドワード朝時代、ワーテルローでナポレオンを破ったウェリントン公爵にも伍せられた英国の国民的英雄であった。キッチナーは職業軍人の子として生まれ、軍人となるべく養育され士官学校を卒業した後、工兵将校として主としてエジプト、インドといった地域で活躍した。そして軍人として最高位の元帥まで登りつめた。また一生妻帯もせず軍隊と結婚したような生粋の武人といわれていた。1914年8月の第一次世界大戦勃発時は陸軍大臣の任にあり、いまだ徴兵制のなかった英国で前線に志願する兵士を募集するのに辣腕を振るったことで知られる。

キッチナーが総司令官として指揮したスーダンのマフディー戦争 (1897~1898) や南アフリカの第二次ボーア戦争 (1898~1902) の勝利はかつて帝国の栄光と考えられていたが、現在の英国においては植民地を収奪するための醜い戦争としてみなされ、誇らしげに語られることは全くなくなってしまった。しかし、百年前のキッチナーは英国の国民的詩人であったラドヤード・キップリング (Rudyard Kipling 1865~1936) が高らかに「白人の責務」としてアジアやアフリカの植民地経営を賞揚していた時代の軍人の鑑であった⁽¹⁾。

キッチナーの名声は日英同盟を締結していた日本でも高く、「英国の女嫌いの偉大な武人」として良く知られていた。第一次世界大戦開戦後、その終結を待たずキッチナーは1916年(大正5)6月5日にロシアへの航海中、軍艦が機雷に衝突し北海の藻屑となり没した。朝日新聞に遺作となる『明暗』を連載中の漱石はキッチナーの溺死のニュースを6月7日の日記に下村少佐と袁世凱の死を併せて記している。

○ 六月七日 [水]

- 袁世凱の死
- キッチナーの溺死
- 北海海戦の際クエーンメリ号に観戦武官として乗り込みたる下村小佐の死
- 一時に伝へらる 其他

『日記』1916年(大正5)(全集20巻)

この二日後の6月9日には大阪毎日新聞で薄田泣菫が「独身元帥」と題する以下のよう
なコラム(『茶話』)を掲載している⁽²⁾。

- キッチナー元帥が不意の横死を遂げたのは、同盟国の為に気の毒に堪へぬ。元帥はあの通りの武断主義者で加之に独身主義者であつたから随分敵も多かつたが、例の皮肉屋バアナード・ショウが『新聞切抜』といふ一幕物で、元帥をモデルに扱つたのなぞは最も悪戯がひどい。 『茶話』 1916年（大正5）6月9日

ここで紹介されている『新聞切抜』（Press Cuttings 1909）とはバーナード・ショウ（Bernard Shaw 1856~1950）の戯曲である。キッチナーをモデルにした「ミッチナー将軍」が女性たち（女権拡張論者）の手の付けられない暴動に遭遇し、周章狼狽したうゑに軍隊の発砲を命じるというものである。すなわちキッチナーの「女嫌いで頑固な武断主義者」というイメージをからかった喜劇である。これはキッチナーが国民の大半が崇拝する英雄であつたが故に成立した風刺劇であるといえる。泣菫がこのようなお世辞にも傑作とはいへない作品にまで目を通していたことには驚かされる。

キッチナーはこの戯曲が書かれた1909年（明治42）11月2日に英国王エドワード7世の名代として宇都宮での陸軍大演習（11月7日から9日まで）の視察に來日した（離日は同月16日）。このときのキッチナーは日本側から熱狂的歓迎を受けた。東京市の芝紅葉館では東京市長、陸海軍大臣などが臨席して大歓迎会が催され、岩崎家はキッチナーをもてなすために清澄庭園内にわざわざ涼亭を建てた。このように最高位の国賓として大歓迎を受けたキッチナーの姿が漱石の作品『門』（四）で主人公宗助の独白に出てくる。

- 今日役所で同僚が、此間英吉利から來遊したキチナー元帥に、新橋の傍で逢つたと云ふ話を思ひ出して、あゝ云ふ人間になると、世界中何処へ行つても、世間を騒がせる様に出來てゐる様だが、實際さういふ風に生れ付いてきたものかもしれない。自分の過去から引き摺つてきた運命や、又其続きとして、是から自分の眼前に展開されべき将来を取つて、キチナーと云ふ人のそれに比べて見ると、到底同じ人間とは思へない位懸け隔たつてゐる。斯う考えて宗助はしきりに烟草を吹かした。 『門』（四）1910年（明治43）（全集6巻）

『門』（三）で宗助はハルビン駅で暗殺された伊藤博文に関して、伊藤は殺されたから歴史的に偉い人になれるのだという皮肉な見方を妻と弟に語っている。宗助のこの発言は、毀誉褒貶はあるにせよ明治の元勳に対する正当な評価とは思えないが、キッチナーに対する独白も同様に、世界的な英雄に我が身を対比し自らの境遇を素直に嘆く弁ではないようだ。宗助は親友の妻を奪つたことで大学は中退せざるを得なくなり、実家からは勘当されてしまい、今はしがたい役所勤めのサラリーマンである。しかし上述の宗助の独白には、自分はキッチナーのような英雄にはなれそうもないが、しかしまた実はなりたくもないという若干の反骨が込められているようにも思える。ここには作者漱石の感情が遠まわしに表明されているのではないだろうか。実際、漱石自身も兵隊になって国家のために戦争に行くなど真平御免の人であつた。

さてキッチナーはこの來日直前、満洲、朝鮮を視察しており、上海から北京を經由し

旅順に日露戦争の旧戦場を視察し、伊藤博文がハルピン駅で暗殺された 10 月 26 日には奉天に滞在していた⁽³⁾。キッチナーは奉天駅を出立する前に伊藤への哀悼の花環を献じている。そしてその後京城を經由し釜山から乗船し下関に達した。これら来日前のキッチナーの動向は逐一、朝日新聞が伝えているが、漱石もまた同紙に旅行記『満韓ところどころ』を連載中であった。また漱石はキッチナーにひと月ほど先立ち、古い友人で満鉄総裁であった中村是公の招きで、上述の旅行記執筆の取材のため満洲、朝鮮旅行を行っていた⁽⁴⁾。そしてその旅程はキッチナーのそれと重なることも多かった。漱石はキッチナーと同じく旅順の二百三高地も訪ね（9 月 10 日）、さらにキッチナーは訪れなかったが伊藤博文が射殺されることになるハルピンの駅のプラットフォームを歩いた（9 月 22 日）。

漱石が作品のなかでキッチナーを話題にしているのは『門』（四）だけであるが、その他にもキッチナーの動向に目を配っていた痕跡がノートや日記に残っている。本稿では同時代人とはいえ人物のタイプとして両極端に位置するような「文人」漱石と「武人」キッチナーの不思議な関係を同時代の三つの戦争を手がかりに探してみたい。

（1）ボーア戦争

1900 年（明治 33）留学先のロンドンに到着したばかりの漱石はまだ不案内なロンドンで南アフリカの（第二次）ボーア戦争から帰還したばかりの兵隊を歓迎する雑踏に遭遇し困却したと記す。

○ 十月二十九日（月）岡田氏ノ用事ノ為め倫敦市中ニ歩行ス方角モ何モ分ラズ且南
 亜ヨリ帰ル義勇兵歓迎ノ為メ非常ノ雑沓ニテ困却セリ夜美野部氏ト市中雑沓ノ中
 ヲ散歩ス
 『日記 I』1900 年（明治 33）（全集 19 卷）

英国ではこの直前の 9 月 26 日から 10 月 24 日までの期間に総選挙が行われていた。この選挙は戦時下の選挙ということで「カーキ選挙」（その年から導入されたカーキ色の軍服にちなむ）と呼ばれた。その戦争とは 1898 年に始まった第二次ボーア戦争（第一次ボーア戦争は 1880~1881）である。十九世紀後半は帝国主義的なヨーロッパ各国がこぞってアジア、アフリカに進出した時代であった。南アフリカでは 1867 年にダイヤモンド鉱脈が発見されたことで英国の関心はより高まった。英国は事あるごとに南アフリカへの介入を強め、1879 年にはすでにインド洋に面した地域に築かれたズールー王国を武力で滅ぼしていた。そして次に英国が南アフリカの覇権をとることの障壁となったのが、十七世紀末から農民として入植していたオランダ系移民（ボーア人）であった。彼らは英国の支配の強いアフリカ南端のケープ植民地から北東に移動し、オレンジ自由国とトランスヴァール共和国を建国した。そしてボーア人が英国の度重なる介入に強く反発したことで生じたのが二度のボーア戦争であった。

1900 年秋の総選挙が行われた時には、ようやくその一年前から指揮をとったロバーツ伯爵（Earl Roberts 1832~1914）の指揮する英軍は優位に立ちつつあったものの完全な勝

利はまだ遠かった。しかし自由党の一部と連立した（与党）保守党はボーア戦争における英国の勝利は確実に時間の問題であると喧伝し、思惑通りにソールズベリー侯を首班とする保守党が議席数を伸ばし再選された。しかしボーア軍が作戦を変更し、ゲリラ戦術を導入すると英軍は再び苦戦を強いられた。

キッチナーはこの不利な戦況を同年 12 月にロバーツ伯爵から引き継いだ。総司令官として大きな作戦変更を命令した。それは 1900 年 12 月末から導入した「焦土作戦」(a scorched earth policy) であった。これはゲリラ活動を支援しているとみなされたボーア人の農場と家畜を焼き払い、その住民（主として女や子供で二十八万人に達したといわれる）を 45 の強制収容所に収監するというものであった。キッチナーのこれらボーア戦争における焦土作戦のおかげで二十世紀に最初に強制収容所 (concentration camps) を導入したのはヒトラーでもスターリンでもなくキッチナーであったという汚名が現在も残る。またキッチナーの強制収容所の多くは衛生条件や食事が劣悪であったため多くの民間人が死亡した。このことが英国の福祉運動家ホブハウス女史 (Emily Hobhouse 1860~1926) のキャンペーンによって本国で広く知られるようになり、作戦を開始して一年後、漱石の留学中の 1901 年末にはキッチナーは収容所への強制移住を停止させた。

しかしすでに焦土作戦の効果がみられ、ボーア人のゲリラ活動は鎮圧された。その結果ボーア戦争は「カーキ選挙」から一年半後の 1902 年の 5 月に英国の事実上の勝利で終結した。このときトランスヴァール共和国とオレンジ自由国が事実上消滅し、英国が南アフリカの鉱山資源を牛耳る準備となるフェリーニヒング (Vereeniging) 条約が結ばれた。

勝利は収めたもののこの戦争は英国にとっても犠牲は大きかった。また露骨な帝国主義の侵略戦争であるという厳しい国際批判も浴びた。英国が国際外交上の「名誉ある孤立」を捨ててボーア戦争終結前に日英同盟を締結したのは、ボーア戦争によって英国の軍事力の限界が明白になったことが大きい。英国は長らく脅威となっていたロシアの南下政策（それは東アジアからインド、アフガニスタンという広い範囲にわたる）を単独ではとても押しとどめることができないという認識を新たにした。ボーア戦争終結後、1902 年 11 月にインド方面軍総司令官となって赴任したキッチナーも英国配下のインド軍の脆弱さを認識し、有事には日本軍による援軍を要請するべきだという報告を本国に送っている (Nish 2012a:316~317)。

日英同盟は漱石のロンドン留学中の 1902 年 (明治 35) 1 月 30 日に現地でも調印され、二度の延長を経て 1923 年 8 月 17 日に 1921 年に調印された英国、アメリカ、フランス、日本の四カ国条約に拡大解消する形で失効した。特に 1902 年の第一次日英同盟は両国がロシアの南下政策を牽制したいという意図の一致があった。そして条約はどちらかの国が交戦状態になり、それが一国対一国ならば中立、一対二以上ならば友国のために参戦するという条件を含んでいた。漱石はたびたび日英同盟とその締結を喜ぶ日本人に対して不快感を述べている。ロンドンから 1902 年 3 月 15 日の日付で中根重一に発送した書簡では「恰も貧人が富家と縁組を取結びたる喜しさの余り鐘太鼓を叩きて村中かけ廻る様なもの」とまで評している⁽⁵⁾。このように漱石はロンドンの下宿先で日英同盟のニュースを苦々しく思いながらも熱心にボーア戦争の推移を見つめていたようだ。その片鱗

が後年の作品になるが次の引用にもうかがわれる。

- (明治 33 年 11 月 12 日に入居したロンドンの最初の下宿に居たドイツ人老人を評して) 南亜の大統領にクルーゲルと云ふのがあつた。あれによく似てゐる。
『永日小品』「下宿」1909 年 (明治 42) 1 月 21 日 (全集 12 卷)

クルーゲル (Paul Kruger 1825~1904) が南アフリカ共和国 (正しくはトランスヴァール共和国) の大統領であつたのは 1880 ~ 1890 年の間で、英国の介入に頑強に抵抗するボーア人の指導者であつた。彼は第二次ボーア戦争の末期にはヨーロッパへの亡命を余儀なくされたが、ヨーロッパで英国へのボーア人の抵抗運動を助けたことで知られ現代でも尊敬を集めている。そしてその魁偉な容貌は欧米の新聞に戯画化された姿で多く掲載されていた。また漱石は次の引用が示すようにボーア戦争は英国の帝国主義者による資源 (ダイヤモンド、金鉱) 収奪のための戦争という認識を持っていた。

- 魯西亜と日本は争はんとしては争はんとしつゝある。支那は天子蒙塵の辱を受けつゝある。英国はトランスヴァールの金剛石を掘り出して軍費の穴を埋めんとしつゝある
『倫敦消息』(『ホトトギス』所収) 1901 年 (明治 34) 4 月 26 日 (全集 12 卷)

そしていよいよボーア戦争が終結したときの漱石のコメントは以下のものである。ここでも漱石はボーア戦争は帝国主義の英国が端緒を開いた植民地戦争であると認識し、それに対する嫌悪感が強く表明されている。

- 1902 June 1. 御寺ノ鐘鳴ル peace ノ報至ルガ為ナリ。八日全国ノ寺院ニテ thanksgiving ヲ行フ自ラ戦端ヲ啓キ自ラ幾多ノ生命ヲ殺シ。自ラ鉅万ノ財ヲ糜シ而シテ神ニ謝ス何ヲ謝セントスルヤ馬鹿々々シキコトナリ
『ノート』IV-14 Taste, Custom etc. 1902 年 (明治 35) 6 月 1 日 (全集 21 卷)

漱石は英国留学を経るとたいへんな英国嫌いになつて戻つてきたことで知られる。それは彼が留学中熱心に新聞報道などを追いかけていた第二次ボーア戦争 (南アフリカ戦役) を通じて英国の帝国主義的な醜い側面をつぶさに観察したことも大きな要因であつたと考えられている (水川 2010:51 が指摘)。このような漱石の第二次ボーア戦争に対する否定的な態度は同時代の英国の知識人ではハーバート・スペンサー (Herbert Spencer 1820~1903) の態度と非常に近いということを指摘しておきたい。スペンサーは晩年のエッセイ集 *Facts and Comments* (Spencer 1902) のなかでスーダンのマフディー戦争と併せて、アフガニスタン出兵 (1878~1880) や第二次ボーア戦争を英国の帝国主義 (スペンサーの用語では軍国主義社会のひとつの側面) として激しく非難している⁽⁶⁾。

ボーア戦争終結の報に接した漱石のコメントはスペンサーがボーア戦争に対して残した 1902 年のエッセイ集 (Spencer 1902) にみられる帝国主義批判と共鳴している。その

エッセイ集から「帝国主義と奴隷制」の冒頭を引用してみる。

- “You shall submit. We are masters and we will make you acknowledge it!” These words express the sentiment which sways the British nation in its dealings with the Boer republics; and this sentiment it is which, definitely displayed in this case, pervades indefinitely the political feeling now manifesting itself as Imperialism. Supremacy, where not clearly imagined, is vaguely present in the background of consciousness.

(Imperialism and Slavery:Spencer 1902:112)

(私訳)「お前たちは服従せよ。我々がお前たちの主人であることを知らしめてやる！」これらの言葉がボーア共和国に対する英国国民の感情を支配している。そしてボーア共和国に対峙する際にはっきりと示されているこの感情が、帝国主義という形で現れた政治的感情に漠然と浸透しているのだ。そして優越感が、それとははっきりと自覚されてはいないものの、(英国国民の)意識の後方にぼんやりと存在している。

(「帝国主義と奴隷制」ハーバート・スペンサー 1902:112)

(2) マフディー戦争

漱石の留学中の「東西ノ開花」と題されたノートのなかでアメリカの心理学者・哲学者ウイリアム・ジェームス (William James 1842~1910) の著書に関して論じている部分に「(キッチナーの) kit ヲ焼キタル例」という意味不明とされる記述がある。

- asceticism. 仏. 土道 — (ノミ) (シラミ) 馬ノ尿スル云々芭蕉ノ句. 一ハ Spartan 一ハ宗教的ニテ両々存在セリ儒仏共ニ歐洲ニテハ中世紀ニカギルナリ. 近来ハ昔人ガ如何ニカハル難行ヲナセシカ寧ロ horror ヲ以テ之遠望スルノミ之ニ習ハントハセズ

又 Christ ノ一類ヲ打ツモノアラバ他ノ類ヲ出セト云フ教ハ無慚ニモ科学, 物質的開花ノ為ニ打死ヲ遂ゲタリト云フモ不可ナシ

(この項の冒頭から線を引いて) <Lord Kichener ノ kit ヲ焼キタル例ヲ見ヨ一此弊ハ James 自身モ認メタリ. Rel.Ex.p.365 此ヲ補フ者, athletics, militarism 等アルニ關セズ
『留学中のノート (東西ノ開花)』(全集 21 卷)

管見に入った限りこの謎解きを試みているのは水川氏 (水川 2010) だけである。そして同氏は「kit ヲ焼キ」をキッチナーの第二次ボーア戦争 (1898~1902) における「焦土作戦」と結びつけて以下のように述べている。

- 漱石は、留学時代の『ノート』に「Christ ノ一類ヲ打ツモノアラバ他ノ類ヲ出セト云フ教ハ無慚ニモ科学、物質的開花ノ為ニ打死ヲ遂ゲタリト云フモ不可ナシ」と述べ、それにつづけて、「Lord Kichener ノ kit ヲ焼キタル例ヲ見ヨ」と記してい

ます。なお『漱石全集』第二十一巻（一九九七年 岩波書店）の脚注には「『Kitヲ焼き』は不詳」とありますが、ここでの「Kit」は「すべて」を意味する俗語的表現ではないかと思われます。漱石は、科学的・物質的な開花による武器や戦術の発達がイエス・キリストの説いた非暴力や寛容の教えの死を招いたと考え、キッチナー将軍が焦土作戦ですべてを焼きはらったことを、その典型的な例として挙げたのでしょう。（水川 2010:49）

このように水川氏の（キッチナーの）「kitヲ焼き」を漱石が深い関心を持っていたボーア戦争における「焦土作戦」と結びつける説は十分に納得できるものである。しかしながら筆者は「kitヲ焼き」によって漱石が意図したのはキッチナーが関わった別の戦争であった可能性を提示したい。

それは第二次ボーア戦争に先立ちキッチナーが指揮したマフディー戦争（1897-98）である。現代の私たちにとってボーア戦争は資源争奪を目的とした帝国主義の時代にみられた過去の戦争とみなすことが可能だろう。しかしスーダンにおけるマフディー戦争は近年の世界規模でのイスラム原理主義の再興をみるにつけ、二十一世紀に生きる我々により切迫した種類の戦争に思える。それはマフディー戦争が近代の西洋列強（英国）による最初の「イスラム国」（イスラム原理主義国）の制圧であったからだ。実際、現代のタリバンやハマスなどのイスラム原理主義指導者がこのスーダンにおけるマフディストの反乱（1881~1898）から強い影響を受けているといわれる。

十九世紀の初頭にナポレオンの軍隊を北アフリカで破った英国はエジプトの覇権を手中に収め、オットーマン帝国が 1840 年頃より瓦解し始めるとナイル川上流（南部）にあるスーダンをエジプトに支配させた。そしてスーダンをも属国としてみなしていた。しかしナイル上流の貧しい船大工の息子であったムハメッド・アーメッド（Muhammed Ahmed 1844~1885）が天啓を受け、近代における最初のイスラム原理主義運動を開始すると状況は一変した。瞬間間にこの運動に多くの支持者が集まり、アーメッドは自らをマフディー（Mahdi「導かれた者」すなわち宗教的指導者）と名乗るようになり、1881年にスーダン南部を中心に「イスラム国」が樹立された。彼らは西洋文化の影響を徹底的に排除し、コーランを厳格に遵守する生活を主張した。また彼らはキリスト教徒を迫害し奴隷制を復活させた。英国は 1883 年に制圧のためにヒックス大尉（William Hicks 1830~1883）に率いられた八千人のエジプト兵を南スーダンに送ったが逆に全滅させられた。

そんなとき 1877 年から三年間スーダンで統治総監を務め、アヘン戦争の時の英国の行政官として中国で実績を挙げたチャールズ・ゴードン将軍（Charles Gordon 1833~1885）がグラッドストーンの反対を押し切ってスーダンのハルツーム（Khartoum）に 1884 年 2 月に交渉役として戻ってきた。しかしゴードンのマフディーとの交渉は不調に終り、英軍とエジプト軍が駐留していたハルツームはマフディー軍に包囲され、援軍のないまま 317 日も孤立させられた。この間、英国ではゴードンに援軍を送れという世論が高まったものの、首相で自由党党首のグラッドストーンは特に何の資源もないスーダンに帝国の体面維持のためだけにこれ以上兵力を割くことに消極的であった。

そして遂に 1885 年 1 月にマフディー軍がハルツーム市内に突入した。市内に留まっていた英兵とエジプト兵のほとんどは虐殺され、ゴードン将軍は首を刎ねられた（マフディーはゴードンを人質として残しておきたかったが激昂したイスラム兵士たちを止められなかったという）。この勝利からまもなくその 6 月にマフディー（ムハメッド・アームッド）はハルツームで病死する。そして彼の遺体はイスラムの戒律に従って当地の廟に丁重に埋葬された。イスラム教徒は再臨を信じているのでマフディーの遺体を大切に保存する。

マフディーの急死で後継者問題が生じたものの南スーダンのイスラム国の支配は揺るがなかった。一方ゴードンのハルツームでの非業の死は大きく英国で報じられた。帝国とキリスト教の殉教者として「ゴードンの仇を打て」というスローガンが叫ばれ、ゴードンに援軍を送らなかったグラッドストーンの自由党政権は支持を大きく落とした。しかしゴードンの復讐の機会はなかなか巡ってこなかった。結局ハルツーム奪回の指示をキッチナーに出したのはゴードンの死から十三年後（1898 年）、ソールズベリー侯を首相とする保守党政権であった。このとき帝国主義的な保守党政権は盛んに愛国心を鼓舞し義勇兵を募り、最新の火器をキッチナーの軍隊に与えた。

キッチナーはエジプトから一万七千六百人（エジプト兵とスーダン兵の混合軍）と八千二百人（英兵）を率い鉄道と汽船で兵站線を確保しつつゆっくりと南下し、遂にハルツーム郊外のオムダーマン（Omdurman）で六万人のマフディー軍と対決した。キッチナー軍は人数の不利を火器の質で補い、マキシム機関銃によって正面突撃するマフディー兵をなぎ倒し、一方的な勝利を収めた（1898 年 9 月 2 日）。キッチナー側の戦死者六百人に対し、マフディー兵の戦死者は一万一千人にも達した。さらにマフディー兵一万六千人の傷病兵は看護されることなく戦場で見殺しにされたといわれる。

9 月 4 日にはキッチナーの率いる英軍がハルツームに入城した。その際、英兵が指導者マフディーの廟を暴き、遺体から頭部を切り離し、さらに遺体に油をかけて焼くという侮辱を加えた。灰になったマフディーの遺体はナイル川に流され、そして彼の頭蓋骨は英軍の誰かが勝利の土産として持ち帰ったといわれている。これがキッチナーの命令であったかどうかは定かではないが、キッチナーがこの復讐行為を黙認したことは間違いない。オムダーマンの戦いに従軍した若きウィンストン・チャーチル（Winston Churchill 1874~1965）も従軍記『湖畔の戦争』（The River War 1899）のなかでキッチナーの軍隊が敵の負傷兵を見殺しにしたことやマフディーの遺体を貶めたことを批判した⁽⁷⁾。またキッチナーの軍隊によるオムダーマンの戦いとハルツームにおける蛮行は漱石が留学していた時期にチャーチル以外の多くの従軍記者によっても報じられていた⁽⁸⁾。

漱石のノートにある「Rel.Ex.p.365 此ヲ補フ者, athletics, militarism 等アルニ関セズ」の Rel.Ex.とはウィリアム・ジェームスの講演録『宗教的経験の諸相』（The Varieties of Religious Experience 1902）のことを指す。漱石はこの本をロンドンで買い求め、ノートを取りながら熟読していたようである。同著からの引用は別の留学中のノート（『信仰ノ害（文芸トノ関係）』全集 21 巻）にもみられる。

漱石が記したジェームスの同著の 365 頁は「聖徳の価値」と題された章の一部である。

中世の時代には「貧しさ」を含む禁欲主義 (asceticism) が聖徳として実践されていたが、それらは今や廃れてしまった。その結果、現代の物質的な贅沢と富裕の礼賛が若者の柔弱と女々しさを助長してしまった。したがって現代ではこれらを矯正する手段として運動競技 (athletics) と兵役 (militarism) が挙げられているとジェームスは指摘している。しかし漱石のノートにそれ以上は記されていないが、ジェームスはその次の 366 頁で兵役 (militarism) に関して、重要な但し書きとして、戦場における兵士のモラルが日常生活のそれとは全く異なることを強調している。その証拠にオーストリアのある将校による「役に立つ兵士」に関する言説を引用している。

- 自分自身の戦友を^{おなど}侮ること、敵の軍隊を侮ること、そしてなによりも自分自身というものをひどく侮ること、これこそ戦争が各人に要求するところである。軍隊にとっては、あまりに多くの感傷や人間的な思慮を所有しているよりも、凶猛にすぎ、残酷にすぎ、野蛮にすぎの方が、はるかにいい。兵士としてなにかの役に立つ兵士であるためには、彼は理性的な思考的な人間の正反対でなければならない。(James 1902:366) (邦訳:160~161)

このオーストリアの将校の言説が正しければ、キッチナーの兵士たちはスーダンでも南アフリカでも十分に「凶猛で、残酷で、野蛮で」あったので、たいへん役に立つ兵士たちであったといえるだろう。

以上のことを考慮すると漱石が「kit ヲ焼き」と記したのはこのオムダーマンの勝利の後、ハルツームでマフディーの遺体を燃やして侮辱したという復讐劇を意味した可能性は高いと考えられる。kit という言葉の意味は依然はっきりしないが、水川説を踏襲して「キッチナーがマフディーの遺体の kit (一切合財) を焼いた」と解釈することは可能である。また「一方の頬を打たれたら、別の頬も差し出せ」という聖書の引用は通常、復讐の連鎖を防ぐ意味で理解されていることを考えれば、ボア戦争における「焦土作戦」よりもハルツームで惨殺されたゴードンのマフディー戦争での復讐行為を指すと考える方がよく当てはまる。

(3) 第一次世界大戦

第一次世界大戦は 1914 年 (大正 3) 7 月 28 日にオーストリアがセルビアに宣戦布告したことに始まる。続いて 8 月 1 日にドイツがロシアに宣戦布告し、8 月 3 日にはドイツがフランスに宣戦布告する。そしてイギリスはロシア、フランスの三国協商国として 8 月 4 日にドイツに宣戦布告し、日本は日英同盟を理由に 8 月 23 日にドイツに宣戦布告した。

第一次世界大戦が勃発した時に先進国のなかで徴兵制を導入していなかったのは自由主義に基づく伝統的な志願入隊制をとっていた英国と米国だけであった。ドイツはすでに 1870 年代から徴兵制を敷いており、オーストリア・ハンガリー帝国、フランス、ロシアもこれに倣って徴兵制を導入していた。日本でも 1873 年 (明治 6) にすでに国民の義務として国民皆兵を目指す徴兵令が出されている。

開戦当時は同盟国側も連合国側もこの戦争は短期決戦で、同年のクリスマスまでに終結すると確信していたといわれる。しかしキッチナーは当初からこの戦争が長期化することを見越していた。それゆえ徴兵制のなかった英国で出来るだけ多くの志願兵を募ることに力を注いだのである。そんなキッチナーのイメージとして強烈なのは、開戦直後1914年に作成された第一次世界大戦志願兵（「キッチナーの軍隊」と呼ばれた）を募集するポスターである⁹⁾。それは軍帽、軍服を身につけた八の字髭のキッチナーが見るものを威圧するように直視しつつ真正面を指さし“Britons wants you. Join your country's army! God save the King”というメッセージを告げるものである。このポスターがいかに効果があったかについては全く同じ意匠がアメリカの第一次大戦志願兵募集ポスターにキッチナーの姿をアンクル・サム（擬人化されたアメリカ）に替えた“I want you for U.S.Army”が採用されたことでも分かる。

さらにキッチナーは軍隊に馴染みのない一般人が前線に志願しやすくするため、同じ地域や職場から前線に志願した新兵たちが同じ部隊に配属されるようにする「仲間の部隊」(Pal's Battallion)を考案した。また同じ頃フィッツジェラルド海軍中將（Charles Penrose-Fitzgerald 1841~1921）は兵役に志願することを渋る男性に心理的圧迫を与えるある手段を思いついた。それは軍服を着ていない男性に対し街頭で女性が「臆病者」のシンボルである「白い羽根」を手渡す「白い羽根（White feather）運動」を組織することであった。これら心理的誘導や脅迫のおかげもあり、1914年8月からの短期間で驚く程多くの志願兵が集まった。実際1914年末の英軍の兵士は七十一万人（そのうちわずか八万人が職業軍人）であった。

それでもキッチナーが死去（1916年6月5日）する前から、戦況に激しさが増し、塹壕戦が長期化するに伴い兵力が不足するようになった。そのためやむなく英国で初めての徴兵制が1916年1月に導入されるに至った。この徴兵制は十八歳から四十五歳までの独身の男子を対象としたものであったが、クエーカー教徒のように宗教的、あるいは家庭の事情などで兵役免除の申し立てを行い、審査で認められれば、後方支援に配属されることも可能であった。しかし自由主義の伝統のある英国が徴兵制を導入したことは世界中で衝撃的な出来事として受け止められた。後で述べるように漱石もこの重大性を認識していた。この結果、1917年には五百万人の英兵が従軍していたが、その約半数が徴兵された兵士であった。

漱石と兵役について語れば、日清戦争が迫る1892年（明治25）に漱石が徴兵を逃れるために本籍を免除策のあった北海道に移したことはよく知られている。そしてこの兵役忌避に関して漱石は自責の念にかられるというようなこともなかったようだ。それは作品『猫』のなかで自分の号である「漱石」を「送籍」と茶化していることと、そして1911年（明治44）の談話で自分の子供がどのようにして父の兵役忌避を知ったのかと笑い話として語っていることに表れている。

○（東風君が昨今の詩は解りにくいと説明する）

「…先達でも私の友人で送籍と云ふ男が一夜といふ短編をかきましたが、誰が読んでも朦朧として取り留めがつかないので、当人に逢つて篤と主意のある所を糺

して見たのですが当人もそんな事は知らないよと云つて取り合はないのです。…」

『吾輩は猫である』(六) 1905年(明治38)10月(全集1巻)

(全集注) 送籍 漱石のもじり。送籍とは、結婚・養子縁組などの理由で、戸籍を他家の戸籍に送り移すこと。漱石には、慶応四年、塩原昌之助・やすと養子縁組をなし、明治二十一年に夏目家に復籍、明治二十五年に分家し、北海道後志国岩内郡岩内浅岡仁三郎方へ籍を移すという「送籍」の体験があった。

- …子供は真実に油断は出来ぬ、親の知らぬ中に親の秘事でも何でも嗅付けるから驚く、先日も矢張小学校へ行つての長男が先生から徴兵忌避は国民の恥辱である、此国民たる義務を遂行しなくては忠良の日本国民ではないと云ふ様な意味の話を聞かされた時、長男がスツト立上つて「ダツテ先生、私のお父さんは北海道へ行つて徴兵をのがれたのですがお父さんは日本国民ではないのでしやうか」と先生に質問を浴せた、先生グツと行詰つて暫く黙つて居たが漸く思付いて「イヤ、あなたのお父さんは外の方で国家のお為になりなされる方だからそれでいゝのです、だが他の方がソナナことをなされる様であつたら必ず諫めて上げなさい」と教へたそうだ。これは後に他の人から聞いたのだが父が北海道に転籍して徴兵忌避をしたなぞ誰が教へたものだけか実際驚かれる。(談)

「夏目博士座談」(『高田日報』1911年(明治44)6月20日)(全集25巻)

漱石の第一次世界大戦に関する見解を『硝子戸の中』(一)(1915年(大正4))と晩年のエッセイ『点頭録』(1916年(大正5))のなかから以下に抜粋し、検討を加えてみよう。

- ① 去年から歐洲では大きな戦争が始まつてゐる。さうして其戦争が何時済むとも見当が付かない模様である。日本でも其戦争の一小部分を引き受けた。

『硝子戸の中』(一) 1915年(大正4)1月13日(全集12巻)

- ② (今度の歐洲戦争がどのような影響をもたらすかと尋ねられて)

「何んな影響が出て来るか、来て見なければ無論解りませんが、何しろ吾々が是はと驚くやうな目覚しい結果は予期しにくいやうに思ひます。元來事の起りが宗教にも道義にも乃至一般人類に共通な深い根柢を有した思想なり欲求なりに動かされたものでない以上、何方が勝つた所で、善が榮えるといふ訳でもなし、又何方が負けたにした所で、真が勢を失ふといふ事にもならず、美が輝を減ずるといふ羽目にも陥る危険はないぢやありませんか」

自分はさう云ひ切つて仕舞つた。さうして戦争の展開する場が非常に広い割に、又それに要する破壊的動力が凄じい位猛烈な割に、案外落付いてゐられるのは、全く此見解が知らず胸の裡にあるからだらうと、私かに自分で自分を判断した。

『点頭録』1916年(大正5)1月(全集16巻)

③ (第一次世界大戦のもたらした影響について軍国主義を挙げる)

独逸は当初の予期に反して頗る強い。聯合軍に対しては程持ち応へやうとは誰しも思つてゐなかつた位に強い。すると勝負の上に於て、所謂軍国主義的なるものゝ価値は、もう大分世界各国に認められたと云はなければならない。さうして向後独逸が成功を収めれば収める程、此価値は漸々高まる丈である。英吉利のやうに個人の自由を重んずる国が、強制徴兵案を議会に提出するのみならず、それが百五対四百三の大多数を以て第一読会を通過したのを見ても、其消息はよく窺はれるだらう。(それに続く章で漱石はドイツの軍国主義・愛国主義で有名な歴史家トライチケ Heinrich von Treitschke 1834~1896 に対する批判を記す)

『点頭録』1916年(大正5)1月(全集16巻)

①『硝子戸の中』に記されたようにたしかに日本は第一次世界大戦の小部分を引き受けた。具体的には日本陸海軍が1914年の年末までに青島と南洋諸島のドイツの拠点を攻略したことを指しているだろう。英国はこの他にも日本に様々な要望を出していた。キッチナーは陸軍大臣として1915年の春から夏にかけて日本が「昨日の敵」であったロシアにより多くの武器を供給することを要請している。その記録が英国公文書館に残っている。当時ロシアは前線を広げすぎ、武器弾薬不足に落ちいつていた。日本側はこの要請によく応え、多くのライフルと弾薬を供給したという(Nish 2012b:162~163)。

②『点頭録』に記された今回の大戦は深い影響をもたらさないよだという漱石の見解は当たっていなかった。第一次世界大戦の原因を特定することは現在もできていない。しかしそれが欧州の社会、文化全般に与えた影響は第二次世界大戦のそれよりも確実に大きかった。そのことはロシア革命を誘発し、戦後にナチズムを勃興させたことを指摘するだけで十分であろう。また欧州で「大戦」(the Great War)といえはそれは第一次世界大戦のことであり、第二次世界大戦ではないことにも前者の影響力の大きさが表れているよだ。

③『点頭録』に記された漱石の第一次世界大戦に関する見解は、漱石を含む同世代の日本人が深い影響を受けたハーバート・スペンサーの社会進化論に基づいて解釈すべきであろう。

漱石は1915年(大正4)のエッセイ『硝子戸の中』(九)のなかで第一高等中学校時代にスペンサーの『第一原理』(First Principles 1862)を友人から借りたことが忘れられないと記している。同著は宇宙、地球、生命、人間社会、言語といったすべての事柄を「進化」(evolution)というキーワードで解き明かそうとした壮大な試みである。スペンサーのいう第一原理というのはすべての事柄は均質性(homogeneity)から多様性(heterogeneity)に進化するとし、またその進化の過程が進行すればするほどその構成要素の自主性は増すということを大原則と考えたことにあつたよだ。

スペンサーは生物の世界でダーウィンが提唱した進化論を人間社会に適用し、「社会進化論」を提唱したといわれている。「適者生存」(survival of the fittest)という新語をつくったのはダーウィンではなくスペンサーである。しかしスペンサーの考えた人間社会の進化は動植物の進化とは異なる側面を持つ。そこでは進化の過程で人間の多様性が増す

だけではない。スペンサーのユニークさは社会進化論は人間ひとりひとりが他者を大切にするという倫理を本能として備えるように進化すると考えていることである。そして大多数の個人がそのような状態に達すると、個人に秩序を強要する国家のような組織はむしろ消滅するとした。このようにスペンサーにとって「適者」とは他者を押しつけて「生存」しようとする利己的な個人では決してない⁽¹⁰⁾。まして強い国家が弱い国家を押しつけて、資源を奪い取り、強い国家の国民が栄えるというような国家主導の「適者生存」はスペンサーの意図したことでなかった。

スペンサーは近代の国民国家を *militant type of society*（軍国主義社会）と *industrial type of society*（産業社会）の混合と考えた。このスペンサーの用語は通常の意味とは異なる。前者は単に軍事に特化した好戦的な社会という意味ではなく、政府が中央集権的で、国民生活に強く干渉する社会を指す。例えば当時、医療とは患者がそれぞれの支払い能力に応じて医者と個々に結ぶ極めて私的な関係とみなされていた。そんな時代にプロシアの宰相ビスマルク（Otto von Bismarck 1815~1898）が、欧州で最初の強制的な国民保険制度を 1883 年に導入したことはスペンサーにとって「軍国主義的」なのである。また貿易に関して「軍国主義社会」は保護主義をとり、国家が主導して他国に侵略することも辞さない帝国主義的な行動をとる。これに対し後者の「産業社会」は単に商工業が発達した社会を意味するのではなく、個々人が高い自由主義の倫理を有していることから権力が分散化され、国家権力の介入は最小限であり、他国への軍事侵略よりも貿易を優先する開かれた社会のことをいう。スペンサーは明らかに社会進化は「産業社会」に向っていると考えていた。

スペンサーは 1881 年（初出）に発表した論文でプロシアの宰相ビスマルクが軍国主義を強硬に推し進めていることに警戒感を表明していた（Spencer 1882:588~590）。しかし英国の場合はズルー戦争（1879）を最後に愛国主義的な風潮は沈静化し、「軍国主義社会」から「産業社会」に進化しつつあると考えていた。ところがその後ビスマルクは宗教を国家の傘下に置く「文化闘争」（*Kulturkampf*）にも成功を収め、ドイツの軍国主義化の勢いは止まらなかった。さらに英仏においてもドイツ帝国に対抗して新たな帝国主義的な侵略戦争をアジアやアフリカに繰り広げるといふ現象がみられるようになった。スペンサーは晩年、欧州各国の軍国主義社会化の傾向をくり返し非難したが、それら逆行する社会進化の矛盾を解くことはもはやできなかった。

③『点頭録』で指摘されているように自由主義を先導していた英国が第一次世界大戦中に国家が個人に強いる義務として徴兵制を導入したことの意味は小さくなかった。また英国では第一次世界大戦前の 1911 年にビスマルクの国民健康保険を模した国民保険が自由党政権によって施行された。これを福祉国家の誕生と称える人も多いが、スペンサーの見方をとれば「産業社会」から「軍国主義社会」への退行なのである。

このようにスペンサーのいう「軍国主義」とは今日の言葉では「集産主義」（*collectivism*）と言い換えるほうがふさわしいだろう。いずれにせよ十九世紀末から二十世紀前半の欧州ではスペンサーの個人の倫理の進化を前提とする自由主義思想は大きく後退し、逆に国家の権力が拡大する集産主義に向かった時代であった⁽¹¹⁾。しかし今、我々が後に生まれた者の立場で二十世紀を振り返ると、英米の自由主義者には選択の余地はなかったよ

うにみえる。つまり英国における徴兵制や国民皆保険の導入、そしてアメリカのニューディール政策に象徴される集産主義的な妥協をこの時代に行わなければ自由主義陣営は、世界史上の集産主義の二雄、すなわち第二次世界大戦におけるナチズムとその戦後のスターリニズムと対峙することは不可能であったに違いない。

(4) おわりに

漱石は 1906 年（明治 39）に門下生であった松根豊次郎（1878~1964）に次のような書簡を送っている。

- 日本人を征服するのは容易なものである漱石先生が英国人よりえらいと云ふ事が証明出来れば日英同盟を誇る日本人はすぐグニヤリとするのである。そこで僕の生活の目的は先づ英国人よりもえらくなる事である。而して百年立てば漱石先生は遂に英国人よりえらい人物となる。そこで自然の順序として日本人は一も二もなく先生に向つて恐れ入るのである一寸是丈を附記する。何だか今日の手紙は気焰誇りである。是は今日食つた西洋料理の御蔭である
『書簡』松根豊次郎宛、年月日不明〔1906 年（明治 39）11 月 17 日？〕（全集 24 卷）

この手紙では西洋料理を食つて精をつけ、西洋人を超克するエネルギーを得るとというのが漱石の卓抜なユーモアである。これを『門』（四）において宗助がキッチナーに関して発した「是から自分の眼前に展開されべき将来を取つて、キッチナーという人のそれに比べて見ると、到底同じ人間とは思へない位懸け隔たつてゐる」という、ことさら卑屈な独白と対比してみると興味深い。この松根豊次郎に宛てた手紙の中で漱石が示した予言は、キッチナーという英国人と漱石という日本人に関しては今や実現している。

キッチナーは百年前、「世界中何処へ行つても、世間を騒がせる様に出来てゐる」英国の誇る英雄であった⁽¹²⁾。しかし現在、キッチナー元帥は英国の醜い帝国主義的侵略の走狗とされ、本国においても批判の対象になつても、その事蹟についてまともに語られることはほとんどない。またキッチナーはスーダン、南アフリカで部下であったダグラス・ヘイグ元帥（Douglas Haig 1861~1928）と同一視されることも多い。ヘイグは第一次世界大戦の欧州戦線を指揮した英軍総司令官で、終戦直後は故国で英雄として迎えられた。しかし現在ヘイグは第一次世界大戦の塹壕戦においてあまりに多くの志願兵を「大砲の飼料」（cannon-fodder）として無意味な突撃死に追いやつた無能で頑迷な司令官であるとされ「屠殺人ヘイグ」（Butcher Haig）とまで呼ばれている⁽¹³⁾。

一方、漱石は世界的に「えらい人物」となっているのではないか。彼の文学は我々日本人のみならず、西洋と東洋の文明の衝突に関心のある世界のすべての人々が読まずには済まされない世界的な古典となっている。我々日本人はもはや一も二もなく漱石先生に向かって恐れ入っているのである。

[注]

- (1) 「白人の責務」(The White Man's Burden) はキップリングが 1899 年に発表した詩である。もともと副題の"The United States and the Philippine Islands"にあるように、同年に米西戦争の勝利によってフィリピンの覇権を手に入れたアメリカにキップリングが捧げた作品である。しかしこの作品は広く文化的・経済的発展に遅れた地域の人々をより良い状態に導くのが「白人の責務」であるというメッセージを持つとされ、欧州列強のアジアやアフリカの植民地主義全般を肯定していると考えられていた。
- (2) この他に泣菫はキッチナーを三度『茶話』の話題に取り上げている。それらは以下のものである。「臭い菓物」(1916 年 6 月 14 日)、「キ元帥の幽霊」(1916 年 9 月 16 日)、「独身主義者と結婚」(1919 年 7 月 17 日)
- (3) 朝日新聞の報道(1909 年 10 月 13 日)によれば来日するまでのキッチナーの旅は以下のようである。

1909 年(明治 42) 10 月 20 日 北京発、21 日 牛家屯発、旅順着、22 日 戦線を視察、23 日 奉天に向かう、24 日、25 日 奉天滞在、26 日 草家口へ向け出発、27 日 安東着、29 日 新義州発、30 日 京城滞在、31 日 釜山発、11 月 1 日 馬関発、2 日 東京着の予定。
- (4) 漱石の日記によれば中村は公に招かれた「満韓ところどころ」の旅は以下のようであった。

1909 年(明治 42) 9 月 2 日 大坂発(鉄嶺丸乗船)、6 日 大連着、10 日 旅順に向う、二二三高地、11 日 旅順港湾見学、12 日 旅順出発、大連着、14 日 大連発、熊岳城着、15 日 松山を訪問、營口に向う、19 日 奉天に向う、奉天着、21 日 撫順に発つ、奉天に戻る、22 日 長春着、ハルビン着、23 日 長春着、26 日 安奉線に向かって出発、平壤着、30 日 平壤発、京城着、10 月 2 日 仁川着、14 日 馬関着。
- (5) しかしながら日英同盟によって日本と英国双方が得るものは大きかった。1902 年の英軍が南アフリカのゲリラ戦争化したボーア戦争に苦戦していたように英軍は募集兵制の制限もあり、強い軍隊を世界中に配備することは不可能であった。アジアではせいぜい西アジア(アフガニスタン)に軍隊を配備するのが限界で、東アジアでのロシアの南下政策を押し留める戦力を持っていなかった。一方日本としては朝鮮の利権を争うロシアとの衝突は不可避と考えられていた。そのために英国の参戦を脅威とすることでロシアと同盟を結んでいたフランスの参戦を阻止することは重要であった。さらに戦費の調達(日露戦争の戦費の七割は外債の起債によって賄われた)のためには日英同盟という後ろ盾がなければロンドンやニューヨークの国際金融市場で日本の国債が売れる見込みはなかった。漱石が嘲笑するように日英同盟を祝する日本国民は踊らされていたかもしれないが、日本の為政者は「鐘太鼓を叩き村中をかけ廻る様」に喜んで無理はなかった。
- (6) 同著は 48 篇の短いエッセイから成っており、その内容は音楽論、教育論から天気予報まで多岐にわたっている。しかし軍国主義、帝国主義批判は大きなテーマとなっている。例えば Patriotism(pp.88-91), Imperialism and Slavery(pp.112-121), Re-Barbarization(pp.122-133), Regimentation(pp.134-141)には痛烈な帝国主義批判が含まれている。
- (7) チャーチルのマフディー戦争の従軍記である『湖畔の戦争』(The River War)の初版(1899)ではこのようにキッチナーの軍隊が行った蛮行を批判して記しているが、1900 年以降の版ではキッチナー批判は削除されている。チャーチルは 1900 年秋の総選挙で初めて保守党から下院

議員に選出された。政治家になったチャーチルは同じ軍拡論者としてキッチナーを敵に回したくなかったからだと考えられる。チャーチルはまた第二次ボーア戦争にも記者として従軍し、後に従軍記を出版しているが、これらはキッチナーが総司令官に就く以前の時期についての記録である。第一次世界大戦勃発時の自由党（アスキス H.H.Asquith 1852~1928）政権でキッチナーは陸軍大臣、チャーチルは海軍大臣としてともに入閣していた。

- (8) 例えばスペクテーター誌（Spectator, 7 Jan.1899）に次のような従軍記者のキッチナーの軍隊の野蛮な行為を批判した記事がある。

"Mr. E.Bennett accuses Lord Kitchener's army of gross cruelty after Omdurman"

(E. ベネット氏はオムダーマンの戦いの後のキッチナー閣下の軍隊による残虐な行為を弾劾する)

- (9) 作家イアン・ヘイ（Ian Hay 本名 John Hay Beith 1876~1952）の従軍記 The First Hundred Thousand（1916）は英国でベストセラーになり、続編 Carrying on after First Hundred Thousand "K1"（1917）も出版された。副題と書中に K1 と略されるのは 1914 年 9 月に最初のキッチナーの志願兵募集に応じた十万人の義勇兵のことである。ヘイの著書はプロパガンダの狙いがあるようで塹壕戦の悲惨な状況はほとんど記されていない。
- (10) しかしながらスペンサーは同世代の白人知識人と同様、多様な人種のうち英米の白人が肉体的にも知性的にも最も進化していると信じて疑わなかった。『第一原理』121 章（Spencer 1862:274-275）では「足が長く頭蓋骨の容積が大きい欧米人」は最も進化した人種であり、逆に「足が短かく鼻の低いパプア・ニューギニア人」は進化に遅れた人種のタイプであると記している。
- (11) スペンサーは個人と国家の関係について検討し「小さな政府」の方が「大きな政府」よりも個人に多くの幸福をもたらす社会を公平にすると考えた。二十世紀前半の世界の潮流はスペンサーの考えとは逆の「大きな政府」に向かったが、二十世紀の後半はその反動としてのサッチャー英首相やレーガン米大統領の政策に「新自由主義」が影響を与えた。その主導的思想家であったフリードリヒ・ハイエク（Friedrich Hayek 1899~1992）はスペンサーを先駆者として評価している。
- (12) カトリック作家チェスタートン（G.K. Chesterton 1874~1936）がキッチナーの没後すぐに彼を称える短い伝記（Lord Kitchener, London 1917）を著している。チェスタートンは偉大な軍事リーダーとしてキッチナーに賞賛を惜しまない。そしてカトリック作家としてなによりもキッチナーがマフディー戦争において狂信的なイスラム原理主義者を打破したことを中世の十字軍になぞらえて讃えている（チェスタートンはマフディーの遺体に対する侮辱については触れていない）。そしてマフディー戦争の直後、フランス軍がスーダンに侵攻しフランスの利権を主張しようとした際、キッチナーが素早く英軍を現地に派遣し毅然とした態度を見せたことでフランス軍を撤退させたこと「ファッシュョダ事件」（Fashoda Incident 1898）における彼の行動も高く評価している。
- (13) 1989 年に BBC で TV 放映された人気コメディ「ブラックアダーは前線に行く」（Blackadder Goes Forth：脚本 Richard Curtis/Ben Elton）は第一次世界大戦の塹壕戦を舞台にしている。英陸軍のブラックアダー大尉（配役 Rowan Atkinson）と志願兵の部下は同じ塹壕に三年近く留まっている。劇中、彼らを死に追いやるべく無意味な突撃作戦を強いてやまないのがメルチャー将

軍（配役 Stephen Fry）である。このメルチャー将軍の風貌と独身主義はキッチンナーから、無能で無神経な性格はヘイグからとったといわれている。

〔参考文献〕

- 薄田泣菫：『完本茶話』（上）（中）（下）谷沢永一、浦西和彦編、富山房百科文庫 1983
全集：漱石全集（全 28 巻）岩波書店 1993-1999
水川（2010）：水川隆夫『夏目漱石と戦争』平凡社 2010
James(1902)：William James, *The Varieties of Religious Experience*, London 1902
〔邦訳〕『宗教的経験の諸相〈下〉』訳者・栢田啓三郎、日本教文社 1962
Nish(2012a)：Ian H. Nish, *The Anglo-Japanese Alliance, The diplomacy of two island empires, 1894-1907*, Bloomsbury Publishing plc (First published in 1985) 2012
Nish(2012b)：Ian H. Nish, *Alliance in decline, A Study in Anglo-Japanese relations, 1808-23*, Bloomsbury Publishing plc (First published in 1972) 2012
Spencer(1862)：Herbert Spencer, *First Principles* (First Published in 1862)
(Reprint of the edition 1904) Osnabrück Otto Zeller 1966
Spencer(1882)：Herbert Spencer, *The Principles of Sociology, Vol II, Part V*,
Chapter XXII- THE MILITARY TYPE OF SOCIETY
Chapter XVIII- THE INDUSTRIAL TYPE OF SOCIETY
(Reprint of the edition 1882) Osnabrück Otto Zeller 1966
Spencer(1902)：Herbert Spencer, *Facts and Comments* (Reprint of the edition 1902)
Osnabrück Otto Zeller 1966

（本稿は 2014 年 11 月 15 日の京都大学近代文学研究会で筆者が発表した内容に基づいています。席上、貴重なご意見を下さった方々に深く感謝いたします。）

（おがはら としお・本学文学部非常勤講師）